（ 続紙 1）

京都大学	博士（教育学）	氏名	木村　大樹
論文題目	自閉スペクトラム症の対人不安に関する心理臨床学的研究		

（論文内容の要旨）

本論文は、自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder ; 以下 ASD とする）、及びその傾向をもつ成人（以下、ASD 者・傾向者とする）の多くが抱える対人不安について、質問紙調査によって全体的特徴を調べた上で、面接調査によって彼ら自身の語りからその体験のエッセンスを描出し、心理学的に考察するものである。

序章では、ASD 者・傾向者の対人不安について検討する前提として、近年取り沙汰される「大人の発達障害」や「グレーゾーン」の事例など、当初の「早期幼児自閉症」から見ると周辺群に位置するケースにも関心が広がっていることから、単一の特性ですべてのケースを理解することが難しくなっていることが示された。

第 1 章では、ASD の対人不安に関する研究が展望される。ASD 者の対人不安は主に「社交不安症」の併存として捉えられており、その要因として自己評定による ASD 傾向の高さや社会的スキルの低さが関連していることが示され、定型的な「社交不安症」とは異なる非定型的特徴についてもレビューがなされた。加えて、第 2 章では、既存の概念との関連からみた ASD の対人不安の位置づけが検討された。特に、日本的な概念である「対人恐怖症」は、自己意識という神経症的な心理が深く関わっているが、ASD 者は自己意識が弱い、または非定型的であることから、ASD 者・傾向者の対人不安に自己意識がどのように関わっているのかが検討すべき点として焦点化された。また、先行研究を踏まえ、当事者の主観的体験を出発点とすべきであることが示された。

第 3 章から第 5 章は調査研究であり、第 3 章は、大学生・大学院生を対象にした質問紙調査研究である。ASD 傾向の高い青年の対人不安の少なくとも一部には公的自意識が関わっていないという非定型性が明らかにされ、ASD 傾向が対人不安に強く関わっていることも示された。第 3 章では、集団の全体的傾向が明らかになったものの、各個人において主観的にどのように体験されているのかが未だ検討されていないことから、第 4 章と第 5 章では、当事者の語りから対人不安を描出し、その要因を探ることが試みられた。第 4 章では、ASD 傾向の高い大学生・大学院生 9 名に対人不安に関するインタビューが行われた。「解釈的現象学的分析」を用いた分析の結果、評価懸念や加害不安といった自己意識に関連する従来型の対人不安も見出されたが、そこにも ASD 者特有の逆境的な体験は影響を与えており、さらには、「話題がない」、「社会的適切さの感覚がわからない」、「会話がうまくできない」等の ASD 特性に関連するタイプの対人不安も見出された。第 5 章は、第 4 章と同じインタビューが 18 歳から 46 歳の成人 ASD 当事者 8 名を対象に行われた。分析の結果、大学生を対象とした第 4 章の調査結果と類似のテーマが得られたが、新たにトラウマや聴覚過敏に関連する対人不安が見出されたこと、「対人的困惑」という対人不安のテーマのバラエティが増えたこと、視線恐怖の質が特異であったこと等、第 4 章とは異なる対人不安の特徴が抽出された。

第 6 章では、対人不安につながりやすい「裏切られる体験」について考察される。裏切られる体験の心理学的背景として、「悲劇」の生成、融合の破綻、人物理解のナイーヴさという 3 つの要因が示され、それぞれ ASD 特性についても検討された。

終章では、これまでの章で得られた ASD 者・傾向者の対人不安の要因について整理した上で改めて心理学的に、特に自己意識および他者性との関連から考察された。最後に、本論文の意義と今後の課題が検討された。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、自閉スペクトラム症（以下、ASD：**A**utism **S**pectrum **D**isorder）傾向をもつと考えられる人や、実際にそのような診断を受けている人が抱く対人不安について考察することを試みたものである。

著者が第 1 章でレビューしているように、ASD と社交不安症（以下、SAD: **S**ocial **A**nxiety **D**isorder）の診断的な併存については、盛んに取り上げられてきてはいるが、そこでは、彼らの体験する対人不安が行動面の特徴から論じられることがほとんどで、種々の非定型的な特徴が報告されていながらも、ASD 当事者の主観的体験からその在り方について探究する試みはいまだ少ない。

本論文では、このような現状を踏まえ、ASD 者の多くが体験すると言われる対人不安について，大学生を対象とした質問紙調査によって全般的な特徴を把握した上で、ASD 傾向の高い者（以下、ASD 傾向者）への面接調査でその体験のエッセンスを描出し、さらには、同様の面接調査を ASD 当事者に行い、それらの比較検討も通して、ASD の対人不安について心理学的に検討することが試みられている。

このような試みは、神経症の一型である対人恐怖症者が訴える対人不安とは異なる、ASD 者の「生理学的次元における人への本能的相互的反応性」（十一, 2004）の障害とはどのような体験であるのかを、調査研究を通して明らかにするという意味で、臨床心理学的に大きな意義をもつものであると思われる。

とりわけ、評価に値するのは、以下の 3 点である。

第一に挙げられるのは、第 1 章において、このテーマでの研究がわが国では未だ少ないという現状を踏まえ、海外の論文を幅広く歩猟することで、ASD と診断的に併存する率が最も高い「二次障害」の一つとされる SAD の特徴を、①年齢と性別、②知能・適応機能、③ソーシャル・スキルと社会的動機づけ等の観点から捉え直し、その非定型性を明らかにした点である。これらの議論は、ASD 者が抱える「対人性の障害」を、われわれがこれまで慣れ親しんできた「病態水準」の枠組みではなく、それ自体独自の体験や障害としてアセスメントすること可能にするものであり、臨床的にも高く評価できる。加えて、このような非定型性を、第 2 章で論じられているように、自己意識の成立／非成立と関連づけている点もたいへん説得力がある。

第二は、第 3 章において、大学生 395 名を対象にした複数の質問紙調査を通して、ASD 傾向高群においては、従来の神経症的な対人不安の構造とは異なり、「自分や他人が気になる」よりも「集団に溶け込めない」という悩みの強さが特徴であること、また、そこには、人からの評価への懸念ともかかわる公的自意識があまり関連していないことを明らかにした点である。公的自意識は、従来的な対人不安と関連が強いと言われてきたもので、非臨床群への質問紙を用いた調査研究のもつ限界はあるものの、ASD 的な対人不安の非定型性を数量的に明らかにしたことは注目に値する。

第三は、第 4 章と第 5 章において、ASD 傾向者（9 名）と ASD 当事者（8 名）に対して、対人不安が喚起される場面を想定した面接調査において得られたプロトコールを「解釈的現象学的分析」の手法を用いて分析することで、ASD 当事者の対人不安に独自の特徴を見出した点である。対人恐怖症は「おのれ恐怖」（新福, 1970）であると言われてきたが、ここでの抽出された「ひと恐怖」というカテゴリーは、“ひと”それ自体に対する恐れであり、ASD 傾向者にも見られなかった。また、両者に共通に見られた「対人的困惑」というカテゴリーのなかの「相手の気持ちがわからない」「うまく同調できない」等もまた、ASD 当事者に特有であり、終章でも整理されているように、これらは、自意識（すなわち、心理的次元）の問題には留まらない、彼らの「生理的次元」での「対人性の障害」の本質を捉えているように思われた。

上記の通り、本論文は、ASD と SAD との関連について、さらには ASD 者の対人

不安について、調査研究というアプローチで、臨床的に見てもたいへん意義深い知見を提示するものであったが、問題点がないわけではない。

口頭試問では、どのような意図でこのような方法論が採用されたのかについての議論が不十分である点、たとえメタ分析であっても、ASD の心理療法の事例研究を取り上げたり、調査事例であっても、いくつかを事例研究的に取り扱ったりすべきだったのではないかという点、「自己意識」等の重要な概念の定義の揺れが本文中に見られる点などについて指摘があり議論がなされた。しかしながら、これらは本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ臨床心理学領域の研究者、そして心理臨床家としての著者の今後のさらなる発展のための課題とされるべきものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和 3 年 5 月 6 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、（期間未定）当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降